様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：２７５０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１５９９８

研究課題名（和文）公衆衛生のリーダー養成に資する修士課程保健師教育の強化：公衆衛生学との連携可能性

研究課題名（英文）the enhancement of public health nurse education in masters courses that contributes to the training of public health leadership

研究代表者
村嶋　幸代（MURASHIMA, Sachiyo）

大分県立看護科学大学・看護学部・学長

研究者番号：６０１２３２０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：修士課程で保健師教育を行う大学院に関して、SPHのある大学院と看護系単科大学大学院での学びや課題を明確にした。その結果、①保健師としてのアイデンティティーが育まれ、②教員や先輩、現場の保健師との豊富な関わり、③忙しさへの対処能力の獲得が、共通に見られた。
また、SPHのある大学院では、SPHの教員や他専攻学生との討議を通して、保健師としての自らを相対化して理解し、専門性を言語化する能力を強化できていた。一方、看護系単科大学の強みとして、長期間の豊富な実習経験が、保健師として現実の健康課題に向き合い、正解がない課題にも切り込んでいく覚悟や能力につながると考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
公衆衛生の課題解決のために、修士課程における高度実践者養成が拡大している。今回の研究で大学院修士課程での学びは《他専攻と交わることによる保健師としてのアイデンティティーの確立》や《保健師について言語化する必要性の認識》が生まれていた。また、《SPHの講義による利益》として、【県の医療計画や費用対効果の講義で専門家の講義を受けることが出来る】、【政策や経済的効果について考えることを学んだ】などが挙げられており、公衆衛生における保健師の位置づけおよび役割期待を理解することにつながると考えられる。
修士課程で育った保健師が公衆衛生領域のリーダーとなるためには、公衆衛生の基盤強化が不可欠である。

研究成果の概要（英文）：This project aimed to clarify learnings and challenges in providing education in public health nurse (PHN) master's courses in graduate programs with Schools of Public Health (SPHs), and in graduate programs mainly in nursing colleges. As a result, three points were identified: 1. The fostering of identities as PHNs, 2. rich relationships with faculty members and senior PHNs in the field, 3. and acquisition of skills to cope with busyness. In graduate schools with SPHs, PHN students could strengthen their ability to relativize and understand themselves as PHNs and to verbalize their specialties through discussions with faculty members and students in other majors'. On the other hand, in graduate programs mainly in nursing colleges, as a strength of focusing on nursing sciences, it was found that long-term abundant practical experience leads to the ability and preparation to face actual health problems as PHNs and to cut into the problems without clearly correct or right answers.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：保健師教育　大学院修士課程　公衆衛生大学院

１．研究開始当初の背景

少子高齢化に伴う人口減少、健康格差の拡大など、公衆衛生の課題は山積している。この解決のためには、公衆衛生従事者の実践力が向上することが急務である。このような背景を受けて、修士課程における高度実践者養成が拡大しており、公衆衛生大学院（School of Public Health、以下、SPH）も増加している。

看護学の領域でも、保健師助産師看護師法の改正で、保健師の修業年限が半年から１年間に延長されたことを受けて、平成 23 年度以降、大学院修士課程における保健師教育が可能となり、27 年度には 10 校まで増加した。修士課程で保健師教育を受けた保健師が実績を出し始め、課程の受験倍率も増え、今後も拡大が予想される。

日本の保健師は、国家免許として、長らく看護師教育に上乗せする形で公衆衛生学を始めとする教育が提供されてきた。そのため、公衆衛生看護専門職としての専門性が蓄積され、世界的に見てもユニークな活動を展開できてきた。特に、看護職であることを活かし、家庭訪問等によって個別事例の問題を把握し、それを地域や社会の健康問題としてとらえ、発信することによって公衆衛生の向上に寄与してきた。

しかし、保健師教育の基盤となる公衆衛生学関連の教育は、各大学院のリソースにより多様性が有ることは否めない。将来、保健師が、その機能を十分に発揮するためには、公衆衛生看護学だけでなく、基盤となる公衆衛生学や関連する学問を身に付ける必要があろう。このリソースは、一つの大学院だけで十分に準備することは難しい可能性もあり、全国的に何らかの手立てを準備する必要性について検討が必要だろう。

２．研究の目的

本研究では、修士課程での保健師教育を実施するにあたり、SPH のある大学院と、看護系単科大学の大学院で、各々どのような学びを得ており、かつ、課題を感じているかについて明確にすることを目的とした。

３．研究の方法

１）対象者及びインタビュー内容

保健師教育を行う大学院修士課程の内、SPH を持つ大学の大学院生および看護系単科大学の大学院生、修了生に対して、各々の強み（良かったこと）と課題、不足していると思うこと等についてインタビューガイドを用いて、グループインタビューを行った。特に、（１）SPH を有する大学院での院生に対しては、SPH を活用した教育の実際（科目と内容等）、その意義や魅力、認識している効果、課題と思うこと等について尋ねた。更に、（２）看護系単科大学の大学院では、修了生にも尋ねた。

２）分析

対象者の許可を得て、IC レコーダーに録音し、逐語録を作成した。逐語録データから研究目的に関係のある部分を抽出しコード化した。コードは類似性・関連性のあるものに整理し、カテゴリーを作成した。

以下、大カテゴリーを《　》、カテゴリーを【　】で示す。

４．研究成果

１）インタビュー結果

（１）SPH を有する大学院生

対象となった大学院生は１年生５名、２年生２名であり、全員が実習を終了していた。インタビュー内容を分析した結果、SPH とのかかわりの意義として４つの《大カテゴリー》および

の【カテゴリー】が抽出された。

《他専攻と交わることによる保健師としてのアイデンティティーの確立》では、大学院生は、SPH の講義演習科目を履修することによって【他専攻の学生と関わることで新たな視点を学ぶことが面白い】と感じていた。この新たな視点とは、【他分野からの保健師への視点や保健師との視点のちがい】であり、【研究テーマ、研究方法、貢献度について他分野と比較し考える】ことや【他分野の学生や教員との意見交換を通してデータと現場の繋がりと乖離を考える】ことにつながっていた。また、こうした他専攻の教員や学生との交流によって【保健師としての独自の視点は何かを考えるようになった】、【「保健師とは何か」「何が出来るか」を考える機会となった】と述べた。

《保健師について言語化することの必要性の認識》では、他専攻の学生や教員とのディスカッションの経験から【他分野や他職種に保健師の仕事を説明する難しさ、説明の仕方を考えるようになった】【保健師とは何かを言語化して説明する必要性を知った】と述べた。

《SPH の講義による利益》として、【県の医療計画や費用対効果の講義で専門家の講義を受けることが出来る】、【政策や経済的効果について考えることを学んだ】と述べた。

一方で、《時間的制約の大きさ》として、SPH との時間割の重複や保健師コースの単位数との兼ね合いから、【時間的に余裕がなく深夜や休日も勉強に追われている】状況があり、それらは【ICT 環境があれば自分の好きなタイミングで受講できる】と述べた。

（２）看護系単科大学の大学院生・修了生

対象となった大学院生は 1 年生 4 名、2 年生 9 名であり、全員が実習を終えていた。修了生は 7 名であり、県（1 名）、市（5 名）、保健者団体連合会（1 名）に所属し約 1 年を経過していた。対象となった大学院の修士課程保健師養成コースでは、3 タイプの実習を構成していた。A.地域生活支援実習（個別ケースの長期、継続的フォロー）、B.地域マネジメント実習（地域住民の潜在顕在化した健康課題を把握）、C.広域看護活動研究実習（対象とする組織等をシステムとして捉え、望ましい方向に向かわせるためのアセスメントと働きかけ）を行っていた。

インタビュー内容を分析した結果、大学院修士課程で学ぶ意義として 5 つの《大カテゴリー》および　17 の【カテゴリー】が抽出された。

《保健師としてのアイデンティティーの確立》では、大学院生は、3 タイプの実習を行うことによって【何事も経験しないとわからない】と感じていた。1 人が 1 施設に赴いて実習を行っており、【実習は全員違うから自分で考えなければいけない】、【根性・度胸がついた】と自覚し、「こなしていくうちに何が必要かわかってきた」と述べていた。また、演習や実習での先輩のアドバイスを【先輩の存在がありがたい】と受け止め、報告会での現場保健師との意見交換を【現場保健師とのつながり】ができたと感じていた。こうした先輩学生や現場保健師との交流によって【保健師として何を求めているのかわかるようになった】、【次につなげるための道筋を考える機会となった】と述べた。

《保健師について言語化することの必要性の認識》では、講義・演習でのディスカッションや実習成果報告会の経験から【資料の可視化の重要性】、【成果をまとめる必要性】、【必要性を納得させる方法を知った】と述べた。修了生は「虐待が考えられるケースを他の機関と一緒に訪問するが、保健師が思う危機感がうまく伝わらないのが悩み」と語り、他部署との連携やシステム化しようと努力していた。

《正解のないことに立ち向かう力》として、【勉強は教えてもらうものではない】、【先輩の真似をしても違う】ことや【正解があることは間違いだったと途中で気づいた】と述べた。

一方で、《多重課題での忙しさ》として、科目数の多さと長期間の実習を行うことで、【精一杯

こなしてきた】状況があり、駆け抜けた感があると述べた。

≪不足している講義･演習≫では､今後の修士課程保健師教育に取り込んでほしいこととして、【統計・疫学の強化】や【事業計画と予算との連動】（予算の仕組みを理解し、根拠に基づき予算案を作成する）といった演習、【幼児期からの発達・発育】の演習、さらには、３つの実習で提言したことを実行するための【計画立案】の演習も必要であるという意見が聞かれた。

３）まとめ

（１）両大学共通の要素

SPH を持つ総合大学と看護系単科大学における保健師修士課程院生および修了生に対するインタビューを通して、共通に下記の要素が挙げられた。

①　保健師としてのアイデンティティー

看護系単科大学の大学院生・修了生は、長期間の実習で現場での手厚い指導をうけ、その学びを繰り返し分析統合しプレゼンテーションする経験により、また、SPH を持つ総合大学の大学院生は、SPH の教員や他専攻の学生と交わり学ぶ過程で保健師としての自らを相対化することにより、両大学の大学院生は保健師としてのアイデンティティーが育まれ確立できたと考えられた。

②　保健師について理解し言語化する能力

教員や先輩、実習における現場の保健師との豊富なかかわりと、SPH の教員や他専攻学生とのディスカッションを通して、両大学の大学院生は保健師について言語化し説明する能力、説得する能力を身につけることができたと考えられた。

③　忙しさへの対処能力

保健師課程は修士課程と保健師指定規則の必要単位数により多くの学修時間を必要とする。長期間の実習や SPH で学ぶためには自らのタイムマネジメントが重要になり、多重課題をやり遂げる力が求められる。このような環境の中で忙しさに対処する能力を獲得できていると考えられた。

（２）SPH を持つ総合大学の強み

SPH の教員だけでなく、保健師以外の公衆衛生を学ぶ他専攻の大学院生と交わり学ぶことを通して、保健師としての自らを相対化して理解する能力が得られる。公衆衛生における保健師の位置づけおよび役割期待を理解することにつながると考えられる。

（３）看護系単科大学の強み

長期間の豊富な実習からの学びが充実していた。実習では現場の手厚い指導から良い経験をしたことが大学院生の満足感につながっていた。現場での豊富な経験は、保健師として現実のひっ迫した健康課題に向き合い、正解がないことに切り込んでいく覚悟や能力につながると考えられる。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計 13 件）

①山辺大輔 ，赤星琴美，川崎涼子，緒方文子，村嶋幸代. 自分たちの健康を自分たちでつくるための地域づくり，日本地域看護学会第 21 回学術集会，平成 30 年 8 月 11 日/岐阜県岐阜市.

②松尾有梨沙，赤星琴美，川崎涼子，緒方文子，村嶋幸代. 保健所が行う青壮年期の歯科口腔保健の支援の在り方の検討，日本地域看護学会第 21 回学術集会，平成 30 年 8 月 11 日/岐阜県岐阜市.

③竹中弥和，藤沢さとみ，川崎涼子，赤星琴美，村嶋幸代. 院内感染対策強化のための保健師による地域医療機関の関係づくり，日本地域看護学会第 21 回学術集会，平成 30 年 8 月 12 日/岐

阜県岐阜市.
④若竹理沙，赤星琴美，川崎涼子，村嶋幸代.　健康寿命延伸のための青壮年期で行う歯・口腔の健康づくり-修士課程保健師教育における実習報告-，日本地域看護学会第 20 回学術集会，平成 29 年 8 月 6 日/大分県別府市.
⑤一丸あゆみ，赤星琴美，川崎涼子，緒方文子，村嶋幸代.特定健診未受診者の実態の把握と未受診者対策の検討-修士課程保健師教育における地域マネジメント実習-，第 6 回日本公衆衛生看護学会学術集会,平成 30 年 1 月 7 日/大阪府大阪市.
⑥松尾有梨沙，赤星琴美，川崎涼子，緒方文子，村嶋幸代.A 市における子どものう歯保有に関連する生活習慣-修士課程保健師教育における地域マネジメント実習-，第 6 回日本公衆衛生看護学会学術集会，平成 30 年 1 月 7 日/大阪府大阪市.
⑦下園理沙，赤星琴美，川崎涼子，村嶋幸代.　自殺対策を通した健康的な地域づくりのための保健師活動，日本地域看護学会第 20 回学術集会，平成 29 年 8 月 6 日/大分県別府市.
⑧藤野里紗，赤星琴美，川崎涼子，村嶋幸代.　健康づくり推進員への支援を通した地区への生活習慣改善の介入方法-修士課程保健師教育における実習報告-，日本地域看護学会第 20 回学術集会，平成 29 年 8 月 6 日/大分県別府市.
⑨山本真悠子，赤星琴美，川崎涼子，村嶋幸代.漁業協同組合に健康づくりを広めるための方策-修士課程保健師教育における実習報告-，日本地域看護学会第 20 回学術集会，平成 29 年 8 月 6 日/大分県別府市.
⑩山本真悠子，赤星琴美，川崎涼子，村嶋幸代.漁村地区の食文化に着目した高血圧症一次予防のための保健活動-修士課程保健師教育における地域マネジメント実習-，第 5 回日本公衆衛生看護学会学術集会，平成 29 年 1 月 22 日/宮城県仙台市.
⑪工藤咲希，赤星琴美，川崎涼子，村嶋幸代.CKD リスクのある住民へのインタビューから見た、CKD 重症化予防のための働きかけ-修士課程保健師教育における地域マネジメント実習-,第 5 回日本公衆衛生看護学会学術集会，平成 29 年 1 月 22 日/宮城県仙台市.
⑫若竹理沙，赤星琴美，川崎涼子，村嶋幸代.萌出期前からの児の歯の健康づくりに取り組んだ保健師活動の展開-修士課程保健師教育における地域マネジメント実習-,第 5 回日本公衆衛生看護学会学術集会，平成 29 年 1 月 22 日/宮城県仙台市.
⑬村嶋幸代，赤星琴美，佐伯和子，平野美千代，高橋香子，永田智子，蔭山正子，二宮一枝，佐藤玉枝.大学院修士課程教育で育成する保健師像と目指す能力,第 5 回日本公衆衛生看護学会学術集会，平成 29 年 1 月 22 日/宮城県仙台市.

６．研究組織
(1)研究協力者
研究協力者氏名：赤星　琴美
ローマ字氏名：AKAHOSHI　Kotomi

研究協力者氏名：川崎　涼子
ローマ字氏名：KAWASAKI　Ryoko

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。